

母校『進路部通信—新宿進化』第2号に38回阿部浩一さんが寄稿

母校ではキャリア教育強化の一環としてこの4月から発刊された『進路部通信—新宿進化』の第2号に38回阿部浩一さん（福島大学行政政策学類教授）が「歴史学の大学教員として、福島県の復興に携わる」と題して寄稿されています。

阿部 浩一（新 38 回、福島大学行政政策学類教授）

私は福島大学という地方国立大学の「行政政策学類」というところで、学部の名称からはおよそ想像できないでしょうが、「文化史」を担当する日本史の教員をしています。

卒業して約 30 年、新宿高校に進学しなかったら、今の自分はありません。自分の人生を決定づけてくれたといっても過言ではない、愛する母校です。その母校の後輩の皆さんに、拙いながらも自身の経験をお話しさせてもらえることを、たいへん光栄に思っています。

私は中学生の頃から歴史が好きで、大学で歴史を学び、将来は高校の日本史の先生になりたいと思っていました。日本史の小野塚克治先生には「歴史なんてやっても就職がないぞ」と言われましたが、好きな学問をしに大学に行きたいという意思に何ら変わりはありませんでした。しかし、インターネットで簡単に情報の得られる今とは異なり、どの大学に行けばどんな先生がいるのか、ほとんどわからない状態でした。

そんな私の数少ない情報源が日本史の教科書でした。中央公論社『日本の歴史』の執筆者のお一人であった故石井進先生の名前を見つけ、一番立派な先生の下で日本史(中世)を勉強したいと思った高校 2 年の私は、それまで一度も考えたことのない東京大学の受験を決意しました。結果として 1 年浪人し、何とか合格できましたが、無謀とも思えた自らの挑戦を支えてくれたのは、有数の東大進学校として一時代を築いた名門新宿高校の伝統の重み、その伝統が培ってくれた新入生としての誇りと自信でした。

数年後に夢が叶い、石井先生の指導を受けることができた私は、2 年間の専門の勉強では飽き足らず、大学院進学の道を選びました。そして修士 2 年のときに東京都立高校の教員採用試験を受け、採用候補者となりました。しかし、当時は合格しても日本史教員の新規採用はありませんでした。悩んだ末、高校教員の夢を断念し、博士課程に進

学して研究者の道を歩むことに決めました。その後、博士号を取得して著書を出版し、長らく大学の研究員や非常勤講師をつとめたのち、縁あって福島大学に奉職しました。

勤務先の大学のある福島県では、東日本大震災と原発事故という二重の災害によって、多くの住民が故郷と強制的に切り離され、長期の避難生活を強いられています。もう 4 年以上経ちますが、復旧・復興も容易ではありません。そうした中で、私は福島の研究者仲間や文化財関係者、学生たちと一緒に、地域住民のアイデンティティーでもある歴史・文化遺産の保全活動に取り組んでいます。具体的には、被災した古文書などを救出し、クリーニングしたのちデジタルカメラで撮影し、データをもとに目録作りを進めています。それらをもとに地域の歴史に新たな光をあてることで、地域と住民を心の面からつなげていくお手伝いをできればと思っています。興味をもった方は『ふくしま再生と歴史・文化遺産』(山川出版社)をご一読ください。同窓会を通じて高校に寄贈してあります。

私は最初から研究者の道を志したわけではありません。大学院を出た後も決して順風満帆とはいえませんでした。今は専門である歴史学を通じて学生の教育や被災地の復興支援に携われることにやり甲斐と喜びを感じています。よく「大学で歴史なんか学んで何になるんだ」と言われますが、歴史学には歴史・文化遺産の保全と継承・活用を支援する大切な役割があります。私の教え子たちは好きな歴史を勉強し、被災地だからこそ経験できる地域貢献を実践的に学びながら、地方自治体や民間企業に就職しています。専門と就職は必ずしも直結しません。大学への進学を希望するなら、将来の就職のことだけを考えるのではなく、自分のやりたい学問を第一に選んでください。そうすれば、その先の進むべき道は自ずと見えてくるはずですよ。どうか失敗を恐れず、果敢に挑戦しつけてください。